



Title	コリングウッドの歴史叙述(その4) -歴史的過程に内在する原理について-
Author(s)	河瀬, 明雄
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1977, 17, p.17-27
Issue Date	1977
URL	http://hdl.handle.net/10069/9657
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T10:45:23Z

コリングウッドの歴史叙述 (その4)

——歴史的過程に内在する原理について——

河 瀬 明 雄

Collingwood on Historical Narration and Its Own Inner Logic, PART IV

AKIO KAWASE

そこでわれわれは歴史過程を循環的パターンとして、あるいは進歩向上（または逆に退歩墮落）する型として捉えようとした諸々の歴史思想についてコリングウッドが最終的にどのような判断を下したかを調べる時がきたように思う。

理想（換言すれば論理）としての歴史と、この理想の歴史を知ることとの間には越えることのできない間隙がある。このことをはっきりと認めた上でなお歴史家はその間隙を埋める努力をしなければならない。これが彼の主張した主要な点であり、しかもこれは言うなれば不可能なことである。ところがこの不可能に敢えて挑戦しなければならないのが歴史思考であり、従って歴史思考の歴史は坦々とした道ではなく、数多くの試行錯誤を経ながら進んできたのであった。

歴史知識について今までみてきたものをここで整理してみると次のようになるだろう。すなわち、それが過去の事実の世界を理解することであるということから、一つには歴史家が理解した出来事は真偽の混在した、どこまで探求していても半知の事実の世界にすぎないということ。と同時に二つには、それは後世の人が直接関与することのできないものであって、たとえどんなに嫌いなことでも目を閉じれば消えて無くなるというものではなく、況んやその事実を改変することなど誰も出来ないことであり、ひたすら受容れる外には対処の仕様の無いものである。さらに三つに過去の事実、しかしながら固定したものではなく、これですべてであると断定することのできないものである。この第三の点については歴史家の主体性の問題として後に触れることと思う。

歴史の理想とは、つまり現実をはっきりさせ、無数の個々の事実において明らかにされるところの無数の個々の事実の世界の本質を説明することによって、首尾一貫した無限の判断において明らかにされた唯一絶対の判断となるということである。(ESSAYS, 46)

ところが実際には、歴史家が上記のことを実行しようとするれば、勢いその限界が働いて、特に自分のはっきり知り得たとする部分（ある時期・時代）だけでもって歴史全体を推測し、その結果誤った歴史像を描いてしまうのである。しかも、その像自体は誤ったものではあるが、決して全く出鱈目なものではなく、歴史の真実からすると、ある一面だけを写し取っているにすぎないだけに、反って面倒なことが起りかねない。たとえば、この点を取違えて歴史実証主義は

歴史家としては誰も皆、全過去を知らねばならない。これができないのは人間の弱さによる。だから過去に関する知識を獲得してゆけばゆく程、その歴史家は良い歴史家となる。(ESSAYS, 100)

と楽観し、理想の歴史を歴史家の手に届くところに置いてしまうのである。だがこれは勿論誤りであって、真相は、

歴史家は歴史研究の進歩からすると、中間報告を提示しうるだけで、そこには間隙がある。この間隙は持続の破れ目、すなわち、歴史家が（歴史の）発展の足跡を見失った時期としてあらわれるのである。(ESSAYS, 87)

以上のような数々の限界を意識しないで、あるいは殊更に無視して歴史の全体像を把握しようとするれば、その歴史家は真実から遙かに遠い「幻」を描いてしまうことになる。これが型としてみえてくる誤った「歴史過程」の正体なのである。

(2) 歴史認識と一体不可分としての「歴史過程」

さてコリングウッドは、歴史過程は現在で終るものではなく、未来が刻々現在となり、やがて過去となってわれわれが対象とする歴史を形成し、従って実在としての歴史は常に変動しているという側面と、先にもみたように歴史家自身の知識の限界から、どのように努力してもその全貌を把握することはできず、その一面しか知り得ないという側面とが複雑、微妙に絡み合っていることを明らかにしている。

こうした状況の中で、幻を描くことなく歴史の真相を捉えるためにはどうしたらよいと彼は言うのか。この点についてコリングウッドは理想の歴史の追求は断念してはならず、むしろこの理念としての歴史の立場を確乎として踏まえることこそ、歴史を理解する出発であり、同時にそれが終着点でもあると考えているように思う。従って彼は理想の歴史を認識するための方法を確立することが問題解決の鍵であり、目的達成の大前提であると考えたみてよい。以下彼の方法がどのようなものであったかについて考察したい。なおその際私はコリングウッドが幾つかの著作の各所で断片的に述べているものを手がかりとして、ここで問題としているテーマに沿って、系統的に組立てることができるのではないかと思う。

まず、コリングウッドのいう方法の目標は、先にも度々述べてきたように対象としての歴史は常に移行し、変化するものであるから、これを固定化して理解してはならないわけであるが、この変化を変化として捉えるにはどうあるべきか。また主体としての歴史家が絶えずその知識を拡大してゆかねばならぬと同時に、歴史家の視点の中心がこれまた絶えず移動するという不利――

これも歴史家を必然的に制約することになるが——にもかかわらず、歴史理解はなにを支えに展開してゆくべきか。しかもこの主体の動き、および対象の運動はそれぞれ全く別々の動きとしてあるのではなく、両者を一つの運動として捉えねばならぬとすれば、これは非常に厳しい、難しい方法といわねばならない。

そこでこのような方法を発見するためには、まず歴史家が歴史家としてなさねばならぬこととなすべきでないことをはっきりと弁別することからはじめなければならぬだろう。

「歴史家の任務は事実、すべての事実、事実以外の何ものでもないものを発見することである。」(ESSAYS, 67) としたコリングウッドは、事実の発見は次のような手順によって成就すべきだとしている。すなわち、「どのような局面（変化の段階）を経て、どのように、何がどう発展していったか」(ESSAYS, 75) について調べるべきだと。

全体を全体として、その総べては知り得ない歴史家は、時期とか時代とかを媒介として、歴史の意味 (plot) を尋ねるためには、そうした時期・時代をそれぞれ孤立したものとしてではなく、発展の一過程として捉えることが必要である。ところが、これをある一つの特色、ある一つの性格のみの展開としてみれば、その特色（性格）が、始まりから中頃を経てやがて終息するという所謂循環パターンに納められてしまう。従って、ある時期・時代をある一つの特色（性格）のみを有するものとして、換言すると、その一つの特色（性格）の自己主張的運動としてではなく、その特色（性格）とは全く異ったものを含む運動——その面だけからすると自己否定的運動——をも随伴するところの運動として、すなわち、歴史過程は運動そのものがダイナミックを発揮することによって作られてゆくものであることをしっかりと押えなければならない。コリングウッドのいう「充分なる理由をもった変化」(ESSAYS, 111) がこれに相当するのであろう。

しかしこれについて彼はその個所ではこれ以上には記していないので、われわれは、その内容を詳しく調べ、充実したものにしなければならない。

コリングウッドは歴史の多様性と統一性の両者を共に備えたものこそが真実の（従って理想の）歴史であるともしていることは先にみた通りであるが、これもまた同じように運動としてでなければ正しく理解できないように思う。すなわち、多様性・複数性だけに目を奪われると、対立するものは唯対立する、静止的状态としてみるだけで終り、時間は分断され、その結果歴史過程を循環するものとみなしてしまうし、一方単に統一性のみからすると、歴史過程を単純に直線的進歩や退歩とみ誤り、真実からは程遠い、伽話を創り出してしまいが、こうした誤謬を避けるためにはどうしても歴史を、ある特殊な内容をもった運動として捉えるしか方途はないように思われる。

それでは運動とは一体何か。また運動の中でこれを捉えるということは具体的にどういうことなのだろうか。

コリングウッドはここで持続性 continuity という概念を導入し、これをキー・タームとして、歴史≡過去≡過程≡変化≡現在という一見矛盾する諸概念を統一的に把握することができれば、

理想の歴史に近づきうるとし、この矛盾の統一的理解に努めたものと考えられる。すなわち、過去の人びとが直面した、いろいろの問題を知ろうとして歴史家は、それが非常に複雑な様相をもっていることを理解し、これらの問題を、その時期・時代の人々がどう解決しようとしたかについて、その解決の仕方を歴史家自身の心の中で再行していくという方法で解明できるとしたが、歴史家の仕事はこれで終るのではないと彼は考えた。歴史過程そのものは、この特殊な問題の特殊な解決で総べてが終ったわけではない。たとえば、これで一つの歴史（事実）が終り、また同じような経過をとって別の歴史（事実）が終るといった細切れは歴史ではない。始めも終りもないダイミク的な動きそのものに即して歴史過程をみなければ、それが虚構になってしまうことは先にみた通りである。もしそうだとすれば、歴史過程そのもののダイナミック性は何によって発動されるのだろうか。

一つの問題の解決が即次の別の問題の生起であること、従って本源的变化は他から与えられたり、強制されたりするものではなく、それ自身の中から起るものとする。そして、この変化をコリングウッドは次のように考えた。すなわち、人の行為（活動）は現在の自己に対する不満の結果であると。

根本的变化はその人自らの中にある。すなわち、それはその人自身の習慣、欲求、法、信仰、感情、価値観の中の変化である。そしてこの変化は必要そのものを内側から基本的に充たそうという試みによって生じる。(ESSAYS, 86)

人の行為は今の自分に満足していないためになされるものである。従ってこの行為の結果が新しい自己の創造であり、その新しい自分が新しい問題を生み、そのようにして永久に変化してゆくのである。(下線筆者；ESSAYS, 86)

こうした考えに沿ってコリングウッドは、たとえばヨーロッパ建築史上、どのような理由で「ノルマン様式」から「ゴシック様式」へ移行したかを次のように説明している。

人びとがノルマン建築をやめてゴシック建築をはじめた理由は全く技術的なものであった。彼らは重量に対する安全度の高い強度比を欲したのである。(下線筆者；ESSAYS, 109)

コリングウッドは人間の欲求（目的を達成しようとする意志）が歴史を推し進める最大の力であるとしているようであるが、歴史の変化の理由をこのようにみると、当然「歴史過程」そのものの中に論理的持続性が貫通していることを意味するものと考えなければならぬだろう。そうだとすれば、人間の欲求が行為を生み、それによって自己を発展させてゆくことが、どうして歴史を連続として捉えることになるのだろうか、角度を換えて検討したい。

(i) 歴史過程 $P_1 \rightarrow P_2$ について

コリングウッドがローマ占領末期のイギリスにみられる著しい社会精神現象としてケルト復興（再生）を指摘し、その原因について幾つかの見解を示しながら、主に文化（社会の生活様式）の特性の形成・持続・消滅という過程の中で、この問題を論じていることは Part I でみた通り

である。一見複雑な様相を表わす具体的歴史の過程も、その根底に在るもの—— P_1 から P_2 への歴史変化を含むすべての過程は、表面上は完全に P_2 となってしまった歴史状況の中に、 P_1 そのものの残留が萌入れされたまま留められている。(下線筆者；A, 140-141)——を正しく把握すれば、論理的展開としてはっきりと理解でき、従って再生という現象は単純に過去への逆行としてではなく、反復繰り返しの形をとりつつも、時間的展開の中に位置づけられる筈であるという。

そこでわれわれは彼のこの主張が歴史を知る上でどれ程有効であるかを調べるために、前記の $P_1 \rightarrow P_2$ という歴史過程の内容について、コリングウッドの説くところをより深く探ってみる必要がある。

$P_1 \rightarrow P_2$ において、 P_2 の中に P_1 が含まれる、あるいは「精神の発展過程、他の(複数の)観念の取巻きの中で他の(複数の)観念から、これらの観念を修飾したり、逆にそれらによって修飾されるという、もちつもたれつの過程を通して、これらの観念に対して自己を主張する観念を文化は有している。」(ESSAYS, 73) とコリングウッドが言う場合の、発展過程(変化)はたとえば P_1 の特性(観念)をAとすると、 $P_1 \rightarrow P_2$ の過程を経てA以外の新しい特性(観念)を獲得するわけである。しかもその際の P_2 の特性(観念)は P_2 の中に P_1 が含まれるのであるから、 $A + \alpha$ とみるべきであろう。この α を仮りにBとすると P_2 はABで表わすことができる。ところが上記の彼の説明からAが P_2 の中に萌入れされていることは一応理解できるとして、いつ、どのようにしてBが加わったのか、またBの特性(観念)がAのそれとどのように異っているか《これを問Iとする》については全然詳かでない。この点に関してコリングウッドはどんな答を用意しているだろうか。

Roman Britain の中で、たとえば喫煙の習慣を説明した例でも分るように、喫煙 \rightarrow 禁煙 \rightarrow (禁煙の戒を破って再度の)喫煙において二度目の喫煙は、前段階の禁煙という全く相反する行為の内に、喫煙したいという欲求が萌入れされた状態で存在していて、そこから消極的表現が積極的表現に転じる機会さえあれば常に再び喫煙という行為が生じることをコリングウッドは明らかにしようとしたものとみてよいだろう。この点に関してもう少し、彼の所論を拾いつつみてみると、たとえばシュペングラーの歴史哲学をヴィコのそれと比べて検討している文中、次のように論じている。

……………文化というものは一様な、全然文化的でない生命から奇蹟によって生まれるものではないということを知っていた。すなわち、粗野はそれ自身の中に文化の種子を有し、その発芽によって文化を生み出したことを知っていたのである。(ESSAYS, 72)

これからすると $P_1 \rightarrow P_2$ を $P_A \rightarrow P_{AB}$ とただけでは、変化の内容を表わすにはまだ非常に不確かで、さらに正確に表わそうとすると、 $P_{AB} \rightarrow P_{AB}$ としなければならないだろう。ところで《問I》の P_2 としての P_{AB} のBがどこから生じたかについては説明されたとしても《問I》についてのこの解答では問題を先に延ばすことにしかならず、直ちに別の新たな疑問すなわち P_1 の特性であるAは果してどこからあらわれてきたのかという点《これを問I'とする》

および $A_B \rightarrow A_B$ への変化はどうして起りうるのか《これを問Ⅱとする》があらわれる。コリングウッドはこれらの点については勿論考えていたようで

……………反対の具体的現実とは他のものとの結合統一のことである。これは区別が全くつかない同一 (identity) ではなくて、対立する二つのものがはっきりと区別はされるが、しかも離れてはいないという結合統一体なのである。……………それとちがひ、対立するものを無理矢理勝手に分離して、AはただAであり、一方その対立物 not-A はただ not-A であるとするのは、誤ってこれこそが実際の具体的現実であると主張されてAが自らの中に not-A を生じ、not-A は逆にAを生むという結果に必然的になってしまう。こうしてAおよび not-A はそれぞれの対立物を生んでゆくわけであるが、そうなった場合には、この二つのものは最早や区別できなくなってしまう。これが coincidentia oppositorum (反対の一致) で、科学的・抽象的思考の足取りを常にあやうくするものなのである。(下線筆者; SM, 197)

すなわち、彼は coincidentia oppositorum を自己とその反対物を安易に同一物としてしまう科学的精神の説明とし、抽象的思考の自殺行為と規定したが、これを乗り越えて、上の引用文の始めの部分で述べているように捉えないと、歴史過程を運動として理解することができない。これこそ私が先に提起した《問Ⅱ》の疑問点にあたるものと考えてよいのではなからうか。コリングウッドは New Leviathan (以下NLと略記) の中で次のように記している。

30・75・政治の世界では、従ってこの変化の過程を支配しようとするれば、変化がどのように変化し、またどこから変化して現在のようになったか、あるいはどのように変化させ、どこから変化させようとしたかを知らねばならない。(NL, 241)

勿論これらの言明だけからは、われわれを直ちに納得させるような答は見出せない。私は先に彼が持続性という語を持込んで、それによって歴史≡過去≡過程≡現在という矛盾する諸概念を統一的に把握しようと試みたのではないかと述べたが、その持続性にコリングウッドがどのような作用を期待していたかを調べることにする。

一般的に言って、それは歴史を支える柱であるが、持続性の本質を貫こうとすると奇妙なことに現実の歴史を徹底的に究明することが不可能となる。換言すると事物には最初も最終もなくなるということである。これを彼は裏側から見て理想の歴史といったものと考えられる。彼のいう持続性について検討する際に助けとなるであろう一つの論を、やや長くなるが引用する。

……………服装について述べた書物は、上衣の丈が長くなったり、あるいは短くなったりした様子を明らかにして、生活のより重要な事柄の中、年と共にあらわれる変化や生成、復活や衰微の本質を力強く、はっきりと説明している。同様に、書物を読むとそれぞれの著者が、自力で、個有の場所を歴史の中に占めていないことが分る。すなわち、哲学者、数学者、化学者、詩人等を通して、この人たちの教養の素地を知る。たとえばライプニッツを通してデカルトを、ダルトンを通してプリーストリを、あるいはまたミルトンを通してホーマーをという風に。“人は手近かにあるものと結びついている”とフンボルトは言った。この格言に含まれる文明の持続の意味は、つまり哲学的原理ではなく、自分の生を知ろうとする人が自分の意見や習慣が、現在のようになった諸段階を知る必要があると考えて始めて実効あるものになるのである。……………われわれはミルトンを通してホーマーに至るだけでなく、昨日を通して、遡れば遡る程魅惑的な過去へと進んでゆくのである。このように起源の探求は人びとを夢中にさせる。われわれは、あることに先立つものの中に、そのあることの起源を見出すまでは、それを理解すること

はできないようだ。……………さきに、私は歴史を最終的に完了することがどんなに不可能なことであるかを知った。そして今、それに対する不可能、継続的にそのものを真実始めから知ることができないというところまでできてしまった。……………その祖先は何だったのか。子孫は一体どこから来たのか。従って“開始”を逆に勝手に固定したり、ただ相対的に限定した時間にすぎないとしない限り、疑問は際限なく殖えつづけるのである。(下線筆者; F. J. E. Woodbridge; *The purpose of history*, 60-64)

これからも明らかなように、われわれは、最初と最後を区別の終着点として置くが、それはあくまでも抽象的にそうするわけで、現実の歴史では絶対的始まりも絶対的終りも存在しない。勿論どのように力んでも経験的には到達できないが、こうした両極を想定することによって(言い換えると現実の歴史家の限界を越え、理想の歴史を設定して)、時間の経過全体を考えて、その中で現実の歴史を捉えるしか他に方法はないとコリングウッドも認めたのではなかろうか。ウッドブリッジと同じように彼も考えていたとみられる節がある。たとえば、

30・76・ 変化の出発点も終着点ともに事実ではない。(ただ変化の局面 phase だけが事実なのだ。) 従って出発点も終着点も変化の事実から抽象されたものにすぎない。しかしこの変化を管理・支配しようとするものは誰だろうと、これについてはっきりした観念をもっていなければならない。(NL, 241)

たとえば $P_1 \rightarrow P_2$ という具体的歴史過程を考えた場合、 $\leftarrow (P_1 \rightarrow P_2) \rightarrow$ と遡及および下降して、その両極を最初(出発点)と最終(終着点)というふうに概念的に規定するのである。

従って現実の世界は、この両極を結ぶ線上のいつどこかに位置し漂う、より正確に言えばその線上を一定方向に進む運動体とみるべきであろう。そう推測した私は、コリングウッドのNLの中に次のような主張を見出したのである。すなわち、

29・2・ これらの三段階(筆者註: 政治生命の三段階、すなわち社会 Society, 内的政治 internal politics, 外的政治 external politics. NL, 29・11-29・15) はそれぞれの ^{ダイアレクティブ} 理論をもっている。皆それぞれ動いており、留まるものは何一つない所謂ヘラクレスの世界である。それは皆 not x から x への永久の変化をもっている。しかし x および not-x の真意はそれぞれによって異っている。(下線筆者; NL, 226)

ここではコリングウッドは勿論歴史そのものを論じているわけではないが、彼が not-x から x への変化を永久の変化とした点は見落してはならぬと思う。すなわち、これこそ上述したように、われわれが持続性を考える際に必ず最後に行きつくところの抽象的、絶対的最初ならびに最終についての問題であり、コリングウッドは、その内容について、それぞれ具体的には異ったものではあっても、相矛盾・対立する結合的統一体として一括して、not-x および x と言いあらわしたものと考える。たとえば、前記三段階の中の一つである社会について、彼の説明をみると、

29・3・ 社会の論理は non-social community として始まるものから、social community へと転換することである。最初は彼らの手に負えない環境のため、一定の方法でしか自分を見出し得ない人びとが、彼らの意志が共同して責任を負うところの関係の体系を自らの手で自由に作り上げるようになる。すなわち、その構成員であることに気づくだけの non-social community から、構成員になる

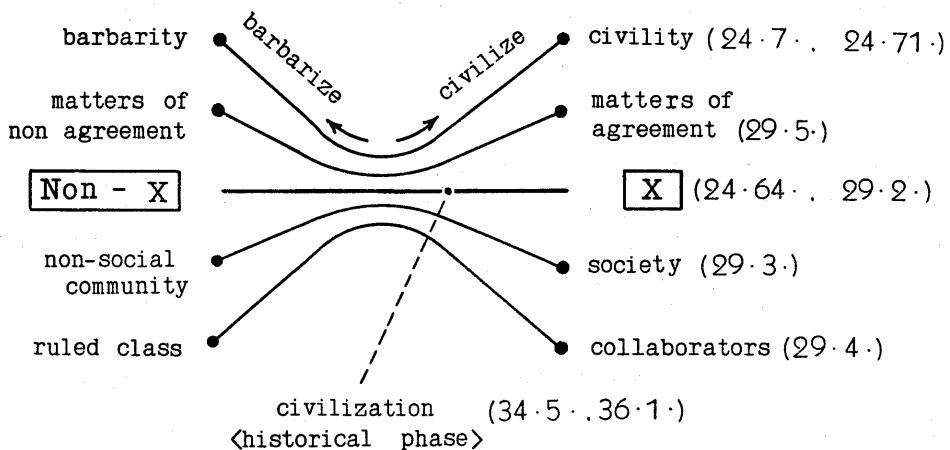
うと努める限りにおいてはじめて、その一員となることができるころ society への自発的転換である (下線筆者; NL, 226)

という場合の society も non-social community も現実に存在する社会ではなく、あくまでも理想の、その意味では実在し得ない Community なのである。そうだからこそ“永久の変化”が意味をもってくるのである。

24・64・ヘラクレスの世界は折衷の世界ではない。非ヘラクレスの世界には折衷はあるかも知れない。それ(筆者註; ヘラクレス世界)は変化の世界である。変化は一对の矛盾物を意味する。すなわち、それらは密接に関わり合っていて、徐々に積極的項が消極的項を凌駕してゆく。not-x だったものがすべて x になってゆく。白ペンキをたとえば黒ペンキにどんどん混ぜてゆく際のペンキ壺を想像してみよ。ペンキは純黒でもなければ純白でもない。つねにそれは薄灰色になってゆく。(NL, 182)

24・66・黒に白を混ぜたペンキについて述べた。(24・64) これと同じことが social と non-social の要素の混じった community にもあてはまる。(NL, 182)

そのように考えると、歴史の全体像を通して、現実の歴史事実を理解するために、現実には存在し得ないところの最初(出発点)から最終(終着点)へと向う方向性を規定しなければならないが、たとえば空間 $S_1 \rightarrow S_2$ や時間 $T_1 \rightarrow T_2$ の如きものと異って、これは単なる方向でなく、全く対立するもの(not-x から x へ)の移行とみなさねばならぬ。ここでコリングウッドが考えたと思われるところを、これまでNL中から拾い上げてきた諸概念をもって図にしてみると次のようになるのではなからうか。〔() 中の数字はNLのもの〕



上図の中で、理想の歴史をマクロ世界として non-x から x までを捉え、現実の歴史の諸局面を、このマクロの世界をそのまま含みもつミクロ世界とみなし、しかも歴史事象は相矛盾する二つの要因が唯混在するのではなく、換言すると、その対立は固定した、平衡のとれたものではなく、極とその対極との間であって、常に振れながら漸近線的に接近してゆく運動としてみることができる。これが $P_1 \rightarrow P_2$ であって、上記のマクロコズムの図式の中で、ある位置を占め、それが non-x \rightarrow x の運動方向にある場合には進歩とか文明化と呼ばれ、その逆の場合には退歩、野蛮化とみなされるのである、勿論ただこの場合 $P_1 \rightarrow P_2$ は時間・空間の過程ではなく、理論

的過程として考えられているわけで、これを直ちに論理・時間的過程とするには不十分である。またここでコリングウッドが、漸近線的に接近してゆくとした意味も先にみてきたように矛盾した二要素の混在状態から、いずれか一つの要素のみになりきることは事実の世界ではあり得ないから、どこまでいっても両要素は残るわけであり、従ってこの場合の変化は永久を前提にしていることである。

34・58・すべての精神過程は漸近線の接近という性質をもっている。t₁ から t₂ へ、もしくは P₁ から P₂ へという空間＝時間の過程は、t₁ あるいは P₁ に現実が始まって、t₂ あるいは P₂ で現実を終る。それは現実に‘最始、点に始まって、‘最終、点で現実を終る。ところが無知から知へ、怖れから怒り、あるいは憶病から勇気へという精神過程は決して単純に第一のものから始まらないで、常に第二のものを混在しているところの第一のものから始まるが、また決して単純に第二のものでは終らず、第一のものによって修飾された第二のもので終るのである。(NL, 284)

そこで、以上の論からして、歴史を理解するためには漸近線的接近という運動状態として考察すべきであるという彼の論理は一応肯定できるとして、それではこうした運動は何によって起るのだろうか。

歴史の変化の段階の真髄は、この局面が次から次へと移ってゆくことである。しかもそれは戦争の場合のように外部から、あるいは革命による内部から、その構造全体を突き破ろうとする外力によって暴力的に破壊されるのではなく、構造自らを他のものに変えてゆく、……………

歴史のダイナミックはその各々の局面が変化の過程を経て、次の局面に変えられてゆくのみを知るだけでは完全に理解されたとは言いがたい。局面と過程との関係は、ある局面はその局面が不安定な平衡状態にあり、しかもそれ自体の中に変化の、それもまさにその変化の種子を蔵していたからこそ、もう一つの局面に変化したのである。この構造全体は安定した、静止の状態にはなかった。それは常に緊張 strain 下にあったのである……………

緊張のないところには歴史はない。異った、一見矛盾したいくつもの方式が、不安定ながらも共存を何とか維持しようとするダイナミックの論理でもって、文明は進んでゆくのである。(Collingwood ; An Essay on Metaphysics, 以下 M と略記. 73-75 より抜粋)

対立物の関係を前述したように反対物の統一的結合として規定すれば、明らかに P₁ → P₂ の全過程に亘って A という性質（要因）も B というそれと全く対立する性質（要因）もともに存在し通さねばならない。そこで A も B も共存しつつ、なお P₁ → P₂ に変化するものが現実存在であるとするためには、反対物の統一的結合は静止的であってはならず、あくまでも常に動いていなければならない。この動因となるのが上記の緊張であろう。コリングウッドが突き止めた歴史に内在する論理とは、この緊張関係のことであり、これが推進力となって展開してゆくのが歴史過程である。そして、この緊張関係を生み出す構造こそが前述のマクロコズムそのものである。

対立が実効ある力としてあらわれないところには衝突はなく、従って生命もない。(ESSAYS, 67)

コリングウッドは実在の歴史の世界、たとえば変化の諸段階としての局面、人間の行為、あるいは文明等を検討して、そこから理念としての図式をマクロ的に想定したわけであるが、要するに歴史事実の一つ一つは個々の、しかも他の個に置き換えられないものであると同時に、個別の、

独特な全体の部分として体系化され、そのそれぞれの位置においてマクロ世界を包蔵しているミクロ世界としての存在であるとした。従って歴史は運動態であり、これを映画フィルムの一齣一齣に相当するものと解しては誤りである。(参照; SM, 218-219, 221, 231-232)

この点について彼は次のような例を引いて論じているところからも明らかであろう。すなわち、ローマ帝国の歴史について、現在の研究者が E. ギボンの「ローマ帝国衰亡史」が時代遅れであるとするのは、現在の研究者が知っている知識量に比べてギボンがほんの僅かしか持ち合わせていなかったからではなく、彼が前記のような内的緊張について十分に感じとっておらずに書いているからである。内的緊張を何一つもたない時代として、すなわち、それを黄金時代として、アントニウスの時代から書き出していること、そうした書き出しにみられる非歴史のあるいは反歴史的な調子がギボンの叙述全体を通して遂に抜けきれなかったことをコリングウッドは暗に非難し、啓蒙時代以降の歴史思考の変化、歴史的理解への深まりを基盤にして論評している。さらにこうした点に関してコリングウッドはシュペングラーが一時大層囁されたが、すぐに忘れられてしまった理由は、歴史事実の集積(シュペングラーはこれを文化と呼んだ)を述べる際、そこから態ときれいに緊張関係を取除き、常にあたかも机上にそっと置かれたはめ絵が、その一片一片が集って全体の絵を構成しているように、すべての歴史事実がそれぞれきちんと位置すべきところに配置されて全体としてまとまった物語を作り上げている。これはシュペングラーが対立物間の真のダイナミックな関係を捉えることができなかつたためであり、ある文化はその対立物によって別のものを刺戟すると考えず、唯それを滅してしまうか、それともそれによって押し碎かれてしまうかの如く考えて、大きな誤りを犯したためという。(M, 74-75; ESSAYS, 66)

このようにコリングウッドにとっては、内的緊張関係を明確にすることが、歴史理解の基本となるべき方法であるということが明らかとなった。そして、この緊張関係は反対物の統一的結合を媒体として働くものであるから、ダイナミックな動因そのものを知ることが即なせ $P_1 \rightarrow P_2$ という過程をとるに至ったかの変化そのものの理由を解明することでもあると考えたものとみてよいだろう。

なお彼が歴史においては、発見さるべき対象は単なる出来事ではなく、その出来事に表わされている思考である (IH, 214) という場合の思考とは、上述した内的緊張関係に外ならない。これを彼流に定義してみると、*thought* とは、歴史の局面 (*phase*) における内的緊張関係 (= *process*) のことであり、また同時にそれはこの *process* の結果でもある。一般に前者を思考と呼び、後者は出来事 (行為) ということになる。従って、過去の出来事の見解は歴史家自身の心の中で過去の思考を再行することによってはじめて達せられるということは、前述したマクロコズムの図式に照らして、歴史家は事実の世界の一部であり、彼自身の歴史思考は彼が研究している歴史過程の所産であるということにも通ずるのである。

(ii) 歴史認識 $P_1 \leftarrow P_2$ について

歴史家は自分を中心に、自分の視点からしか歴史をみることができない。

すべての歴史家の世界の直径が無限であるとするれば、各々の歴史家の世界は他のすべての歴史家の世界と完全に一致するだろうが、そんなことは起り得ない。すべて歴史家の世界は、その歴史家の知識の限界に制約される。(ESSAYS, 53)

歴史家はだれも皆、自分を中心に、自分の角度から歴史をみる。従って、他の誰もみない問題を考え、そしてその問題のある観点、彼独自の面からみる。……………

そして歴史家の観点自体も一定不変なものではない。彼が認識する世界は、その直径の拡大によってだけでなく、その中心の移動によっても絶えず変化する。彼の問題は、その一つが解決され、その解決の中で他の問題が生れるだけでなく、彼がそれを解きおわる前に、それに対する興味を失って、そのためにも変わるのである。(ESSAYS, 54)

しかしコリングウッドはこのような限界を歴史認識の障壁としてではなく、むしろ出発点とすることによって、歴史に迫っていったのである。

歴史家とは、過去を問う人である。彼は一般にその問を専ら過去について発する人であるといわれる。過去についてとは敷衍すると、死んだ、過ぎ去ってしまった、あらゆる意味で現在ではもう生きていないものについてということである。この考えが幻想でしかないと気づく以前には、私の歴史思考の研究は殆んど進捗しなかった。歴史家は過去についての証拠をもたなければ、その問には答えることはできない。従って、証拠はもし歴史家がこれを“有する”ならば、彼のいまの世界、換言すると、いま・ここに存在するところの何かでなければならぬ。(A, 96)

との前提に立つて、彼は歴史家の対象とする過去は、「現在も生きつづけている過去」でなければならず、その観点からすると、歴史は出来事ではなく過程を取扱わねばならないと考えるに至ったのである。

(昭和51年9月20日受理)